



Interview

仕事人インタビュー

「今」の積み重ねが、夢の実現につながっていきます

俳優、歌手 山崎育三郎さん

—今の仕事に就いたきっかけは？

小学校6年の時、オーディションを受け、初めてミュージカルに出演しました。半年間の厳しい稽古をして、どうにか初日を迎え、カーテンコールで拍手を頂いた時、「こんなすごい世界があるんだ」と自然と涙が出てきました。人前に出ることが苦手だった僕が、舞台上でならば役を通して自分を表現できると確信した瞬間でした。

—高校時代はアメリカに留学されていますね。

教育や文化の違いを実感しました。留学先の高校に授業中、ガムを噛みながら足を机に乗せている女子学生がいました。とても先生の話の聞いているように見えません。でも意見はちゃんと言うんです。なんだ、すっかり聞いてたんだ、と。帰国後に通った日本の高校では、みんなお行儀よく授業を受けているのに、先生が黒板の方を向いた途端、

机の下で携帯をいじったり、プリクラを交換したり。先生が振り返るとまた聞いているふりをする。

また、イベントや友人宅などに誘われた時、日本だと「みんなが行くなら自分も」と言いがちです。でもそんな風に答えると、「お前はもうどうしたいんだ」と怒られました。

—仕事の場でも海外との違いを感じますか？

日本には「ダメ出し」という演劇用語があります。僕もたった一言のせりふで、

「帰れ」、「へたくそ」と一時間近く怒鳴られたことがあります。

一方、欧米で使われる「ノート (note)」という言葉は、演出家がイメージを伝え、俳優が考えるところという意味があるので、ダメな表現なんて一つもないと捉えるんです。

僕が影響を受けた『ミス・サイゴン』の演出家、ダレン・ヤップ氏は、役者の気持ちが一番に考え、対話する時間を大切にしている。稽古の時、芝居に入る前には、先輩も後輩も関係なく共演者が円になって手を握り、登場人物の心情について意見を話し合い、共有するんです。おかげで自然に芝居に入ることができました。

その上、海外ではチームに必ず「心のケア」の先生が専属でついています。日本ではまず考えられません。海外の俳優と話す時、「どうやって心を整理しているの?」とびっくりされます。

でも、不安もありましたよ。テレビに出る分、ミュージカルの出演数を減らすことになる。「売れるかどうか」は心配もされました。そんな中、テレビ一作目が、高視聴率を記録した『下町ロケット』だったのは幸運でした。今ではテレビで僕を知った方が、劇場に足を運んでくださることも多いです。

—お忙しい中、家庭との両立をどうしていますか？

僕は家族優先ですよ。そもそも俳優を職業とも思っていないので、あまりオン・オフを区別して考えていません。よく俳優仲間から、「どうしてそんなにいつもフラットに過ごすごうができるの?」と聞かれますが、好きなことに集中しているからだと思います。



山崎育三郎(やまさき-いくさぶろう) 1986年生まれ。2007年にオリジナル演出版『レ・ミゼラブル』マリウス役に抜擢。以降、『モーツァルト!』『プリシラ』『エリザベート』など、多くの舞台へ出演。15年、ドラマ『下町ロケット』(TBS)出演後はドラマ、映画などでも幅広く活躍。2020年NHK朝の連続テレビ小説『エール』に主人公の幼馴染役で出演。

—今後、挑戦してみたいことはありますか？

日本発のオリジナルミュージカルをつくることです。以前、韓国のオリジナル作品第一号に出演したので、制作に関わった人たちが皆、「僕らはレ・ミゼラブルやキャッツに負けない韓国のオリジナルを世界に出すんだ」と口々に話すことに驚きました。日本では「レ・ミゼラブルやキャッツに出たい」という目標が多いんです。今では韓国発の作品が世界中で上演されています。

は若手が活躍できる「場」になれば、と思っています。

—「YELL」の読者にエールをお願いします。

世の中、必ずしも夢ややりたいことが決まっている人ばかりではないですよ。夢や目標のあるなしにかかわらず、まずは目の前にあることに一生懸命取り組んでみてください。そうしているうちに、いろんな体験をしたり、いろんな人と出会ったりして、いつの間にか自然に新しい夢や目標ができることもあります。僕の場合は歌手だったり俳優だったりいろんなことが変化していきました。結局、「今」の積み重ねが、結果として夢の実現につながっていくのだと思います。

自分たちの世代で日本オリジナルのミュージカルを上演したい